卓球王国連載パック“ePAC.”

全日本卓球選手権大会

（2015.1／平成26年度）

チャンピオン インタビュー
水谷隼・石川佳純

【REAL! TT 速報 全日本2016.1】バージョン

卓球王国2015年4月号（vol.215）に掲載した、平成26年度（2015年1月開催）の全日本卓球選手権シングルスチャンピオン インタビュー（水谷隼・石川佳純）、全14ページ（e Bookで追加した扉や余白を除く）をまとめた。

卓球王国

【王国e book】について

● この【王国e book】（e PAC.）は、月刊『卓球王国』誌に掲載された連載やシリーズをまとめたパックです。

● **閲覧は、卓球王国WEB【REAL! TT 速報 全日本2016.1】で有料速報をご利用いただいている方の、個人的な利用に限らせていただきます**。商用利用、複製したファイルの譲渡、販売、ネット等での配布を禁止します。PDFから一部のデータを抜き出したものについても同様です。

● **本ファイルの複製は原則禁止**です。ただし、お買い上げいただいた方の個人利用に限り、ご自身所有の複数の装置（パソコン、タブレット等）にコピーして閲覧することが可能です。

● お問い合わせは、卓球王国WEB「お問い合わせ」フォーム（トップページ画面左下の青字リンク）から、もしくは以下宛にお願い致します。

（株）卓球王国
電話 03-5365-1771

→ 見開き表示の
右ページ

閲覧に際して

● PDF形式による電子書籍で、パソコンやタブレットなどでご覧いただけます。PDFの閲覧には「Adobe Reader」またはその他のPDF閲覧ソフトをご使用ください。

● パソコンのモニタで閲覧する場合、ページ表示を「見開きページ」に設定すると、実際の冊子のように見開き表示で見やすいでしょう。タブレットで閲覧する場合は、「単一ページ」のほうがサイズ的に見やすいでしょう。

●「Adobe Reader」で見開き表示する場合、以下のように設定してください。設定に関する詳細は、「Adobe Reader」のヘルプ等をご覧ください。

①［ページ表示］メニューで「見開きページ表示」にチェックを入れる。

②［ページ表示］メニューで「見開きページ表示で表紙を表示」にチェックを入れる。

見開き表示では、本ページが左ページ、前ページが右ページに来れば、実際の雑誌と同じ配置になります。もし左右が逆に表示される場合は、「環境設定」（Windowsでは［編集］メニュー内、Macでは［Adobe Reader］メニュー内）の「言語」で、「デフォルトの読み上げ方向」を「右から左へ」に設定してください。

見開き表示の
左ページ

本e-bookは2015年12月17日作成

Copyright ⓒ卓球王国, All right Reserved

THE CHAMPION'S INTERVIEW 1
JUN MIZUTANI

［チャンピオンインタビュー］

水谷隼

●beacon・LAB

「日本でのんびりやっている選手に負けたくない。
ぼくは試合もたくさんしたいし、日本では満足できないから……
その意識の差じゃないですか」

なぜこの男は勝ち続けるのか。
平坦な優勝への道のりではなかった。
水谷隼は敗戦の淵まで
追い込まれながらも最後は勝利の拳を突き上げた。
9年連続の決勝進出は小山ちれに並ぶ大記録だ。
王者としての不変の強さと進化していく強さ。
水谷隼は日本の頂点に立ち、見慣れた景色から何を語るのだろう。

聞き手＝今野昇（本誌編集長） interview by Noboru Konno
写真＝江藤義典＆奈良武 photographs by Yoshinori Eto & Takeshi Nara

優勝する自信はなかったし、厳しいと思ってました。組み合わせも厳しかった

優勝を決めた瞬間、王者は静かだった。重圧から解放された安堵感を漂わせ、周りも勝ったことに驚きを見せない。それが水谷隼の7度目の優勝の風景だった。

全日本選手権で優勝を決めた2日後にはロシアリーグに旅立った水谷隼。これもプロフェッショナルとして当たり前にこなす。そして試合を終えて帰国直後に、彼の都内の自宅でインタビューは始まり、じっくりと話し込むことになった。

●

――優勝から1週間経ちました。大会は長く感じましたか？

水谷　試合をしているのは4日間でしたが、2日終わって、今までなら次の日が最終日なのに、まだ半分かと思ったら（大会の途中では）すごく長く感じましたね。

ワールドツアーでもシード選手は金・土・日曜で終わりだけど、1週間というと世界選手権と同じだから、1週間を緊張感ある中で過ごすのは大変でした。

――大会前の調子としてはどうでした？

水谷　タイペイで招待試合があって、1月5日に帰ってきて、7日から練習を始めて、すぐに首を傷めた。むち打ち症みたいに首が動かなくなって、普通の姿勢で生活するのも痛かったんですよ。医者では捻挫みたいな感じと言われ、電気治療とかしただけで、練習は11日まで完全に休んで、何もできないからボーッとしてました。12日が大会の開会式で30分ほど練習しました。

――不安にならなかった？

水谷　いや、全然。練習しないことで不安にはならないけど、体を動かせないことは不安でした。食べて体も重くなるわけだから。12日は首は痛かったけど、がっつり筋トレはしたし、最初の試合の時にはかなり治っていました。初戦は龍崎（JOCエリートアカデミー）で相手も相当強いし、プラボールになった大会なので感触を確かめる感じでした。今回は優勝する自信はなかったし、厳しいと思ってました。組み合わせも厳しかった。森薗、吉村、岸川さんか健太……自分の体が保つかなという不安。だから全部4-0で勝ちたかった。4-2とか4-3の試合をするときつい。だから4日間でそれだけの強い相手と連戦する自信があまりなかった。

――そして最初にして最大の難関だった5回戦の笠原戦（協和発酵キリン）を迎えます。

水谷　彼には負けないと思っていた。負けたこともないし、4-0か4-1かなと思っていた。（競り合った原因は）やっぱりボールですかね。

――笠原選手は試合後に、「水谷戦に照準を当てて、ジャンケンも考えていつもと違うボールを選び、勝ちを狙った」と語っていました。

水谷　笠原はタマスのボールしか使っていないと聞いていたのに、選球所に行ったら彼が事前に選んでいたのがニッタクだった。「あれ？」と思ったけど、「それじゃ、おれもニッタクで受けようか、そっちの土俵でやろうか」と考えましたが、契約もあるし、その度胸がなかった。だからぼくはタマスのボールを選びました。そして試合でコートに入ってジャンケンで彼が勝ち、ニッタクのボールでスタートした。

――でも大会前にニッタクのボールでも練習をしていたでしょ？

水谷　多少はしてました。

――ボールが普段のものと違うけど、1ゲーム目を取っている。ということはボールが合わないからスタートから悪かったようにも見えない。

水谷　笠原もニッタクでそんなには練習していないから、相手のほうが最初はボールに合っていなかったんですよ。1ゲーム目を取って、2ゲーム目も3-1でリードして「ああ、余裕だな」と思って、「今後もニッタクのボールでやるかもしれないから様子を見るか」なんて考えていたら、ずるずるいっちゃいました。3-1から（3-7と逆転され）2ゲーム目を落とした。その時点であんな試合になるなんて考えていなかった。

3ゲーム目あたりから厳しいなと感じ始めてました。サービスが全然出せなかった。ナックルしか出せなかった。相手のフォア前のところにツーバウンドで入れていくサービスが切れば切るほど横に流れて、ワンバウンドで台から出て、それをレシーブで強打される。そのためにナックルサービスしか選択肢がなくなったから、ずっと同じサービスしか出していない。

それに1ゲームで5本ずつくらいラケットの角に当てていた。自分の中ではチャンスボールだと思って振っているのに、ラケットの角にしかボールが当たらない。角ばかりに当たって感覚がつかめない。4ゲーム目は5-5から3本連続ネットインされて、「これはやばいな」と思いました。

――それで1-3とゲームをリードされた時の心境は？

水谷　もうあきらめてました。もう無理だなと。ある意味、リードされていることをボールのせいにして開き直ってました。「負けてもいいや」と思う自分と「勝ちたい、もっと頑張れ」という自分が半々くらいあった。4ゲーム目を落と

「負けてもいいや、と思う自分と『勝ちたい、もっと頑張れ』という自分が半々くらいあった」

したけれども、後半良いプレーができていた。ベンチに戻り、「結構厳しいよ」と言ったら、コーチの邱（きゅう）（建新）さんに「今のプレーだったら勝てるよ、逆転できるよ」と言われました。

――5ゲーム目を11-5で取り、6ゲーム目はジュースで取った。

水谷　6ゲーム目の10-5でリードしていて、そこから次のゲームを見据（みす）えていろいろ考えていたらずるずるいかれた。10-10の時に「ああ、やっちゃったな」という感じだった。何とか取れたのはたまたまですよ。

最終ゲームへ入る前に、「5、6ゲーム目のプレーでそのままやれば勝てるよ」と邱さんに言われたけど、自分としては勝てるかどうかわからなかった。ただ、相手も焦っているなと思っていた。最後のゲームは自分のネットインが2本くらいあってラッキーだなと思いました。10-7でマッチポイントを取ったけど、チャンスボールが来たのにミスして「やばいな」と思ったし、ジュースになった時には「また、やっちゃった」と。

――過去の全日本でも負けそうな試合をひっくり返してきたけど、今回の笠原戦も相当に危なかった。

水谷　苦しかった分、終わった瞬間に、「この大会は優勝できるかも」と思ったし、周りにもそう言ってました。一回負けているようなものだから他の人よりもプレッシャーが取れるんですよ。

「優勝は難しい」と思う自分と、「優勝するだろう」と思う周りとのギャップは、今まで以上に大きかった

――次はひとつのヤマだと大会前に思っていた森薗戦。4-1だったけど各ゲームは競っていた。

水谷　組み合わせを見た時に一番きついかなと思ってました。グランドファイナル（12月／バンコク）では0-3で負けていてひっくり返した相手で、そこで一度やっていたのは大きいですね。2年前の全日本でも4-2くらいの試合をしている。今回は1ゲーム目7-1でリードしていてそこから追いつかれている。でも、その時は油断していないし、焦らなかった。集中力を切らさずにやれたし、あの試合が一番良い試合だった。評価できる試合だし、相手も調子が良かったと思う。

――次の準々決勝は吉村戦（愛知工業大）。3年前の決勝で負けた相手です。

水谷　3年前に負けてからも何度かやっていて、（11月の）ロシアオープンでも4-2で勝っていて、何となく戦い方はわかっていた。準々決勝から台が2台になって、卓球台のバウンドが全然違うんですよね。照明のせいなのかわからないけど弾みが違う。自分は小さく出している感覚なのに8割くらいは大きく台から出て、レシーブから打ち込まれた。嫌な感じでした。1ゲーム目、10-7から10-11になったけど、また逆転して13-11で取れた。10-11で吉村のウエアに当たってからボールがネットインで入ってきた。審判はそれに気づかなかったけど、ぼくが指摘したら吉村も「当たった」と言ってくれた。彼もフェアだった。作戦を途中からガラッと変えたのがうまくいきました。

――最終日、準決勝は松平健太選手に勝って上がってきた岸川選手が相手だった。打ち慣れている岸川選手は嫌な相手だと以前から言っています。

水谷　今回は苦手な感覚は少なかった。大会に入ってから3日間ほど一緒に練習をしていたから慣れていた。ほぼ自分のイメージどおりの戦い方ができました。

――競り合った笠原戦はフィッシュなどでしのぐ展開が多かったのが、試合が進むにつれて台の近くでプレーすることが多くなっていった。準決勝、決勝でもフィッシュやロビングでしのぐ場面が本当に数えるほどしかなかった。

水谷　自分ではあまり意識していない。台につこうと思っているわけじゃない。日本人はボールの威力がないから前で十分できる。下がるところまでもっていかれなかった。

――以前なら1本ブロックしてしまうようなボールを、今は前で伸ばしたり、カウンターをするようになっているから台から下がらない。

水谷　練習でそれを意識していることもあるし、プラスチックボールになってからボールの回転量も減って、今のラバー

5回戦の笠原戦で、窮地に立たされた水谷は、最終ゲーム、ジュースで勝利をつかんだ

4 3
水谷隼 VS 笠原弘光

11-6	11-5
6-11	12-10
8-11	12-10
5-11	

Round 5
5回戦

の特徴を生かしやすい。『（テナジー・）64』は回転量の多いボールに対してカウンターは難しいけど、プラスチックになってからは回転量が減ってカウンターがやりやすくなったので、打たれてから劣勢になることは少なくなりました。

――決勝は神選手（明治大）でした。

水谷　頑張っていた後輩の神（じん）が上がってきてうれしい半面、嫌な気持ちもあった。ただ反対側のブロックから丹羽が来たら、分が少し悪い面もあるから嫌かなという程度で、相手は誰だろうとあまり気にしない。

大会前に神とは練習もしてなかった。明治大にいる時には彼とはよく練習していた。彼はぼくのサービスをレシーブするのを苦手にしていたし、久しぶりにやるのでサービスが効くなと思っていた。ところが、自分が効くと思っていたサービスと実際に試合で効いたサービスは全く逆でした。今までは普通のサービスを出すとチキータされていたので、逆の回転を出したら、そのサービスをうまくレシーブされた。逆に普通のサービスが効いたし、チキータされなかった。

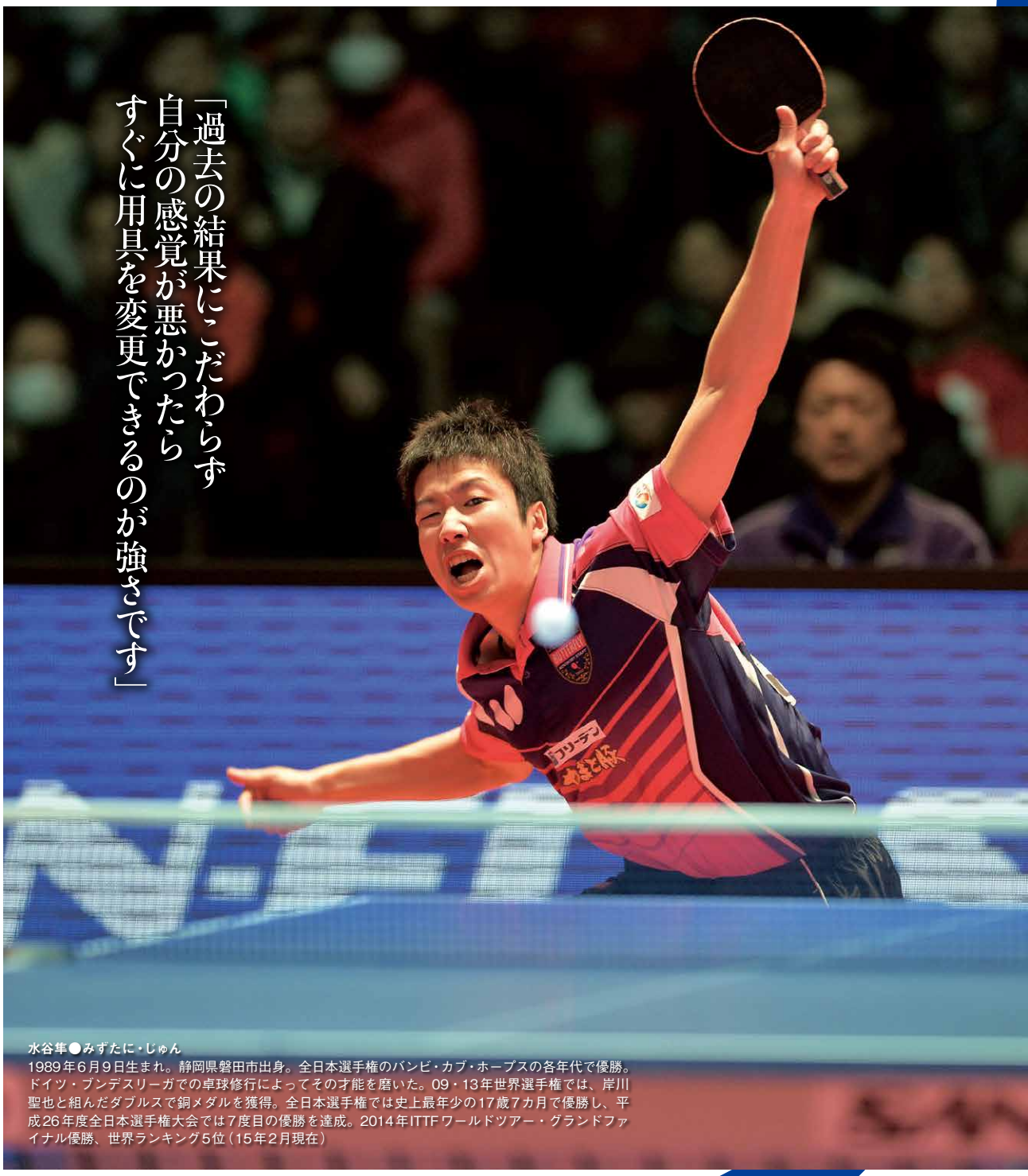
ぼくのイメージでは神はチキータからバックをどんどん振ってくる感じだったけど、やった人から聞いたらほとんどオールフォアの感じで打ってくると言われた。ぼくはチキータから攻められたら嫌だから、そのほうが良かった。対策も立てやすかった。レシーブさえできれば問題ないと思っていました。

――なぜノーランカーだった神選手が勝ち上がってきたのだろう。

水谷　（大島戦で）0-3から逆転勝ちとかをやっている選手はトーナメントでは強いんですよ。勝ち上がりやすい。

――優勝を決めた瞬間のポーズも今回は地味だった（笑）。大会前は大本命だったのに、本人と周りの見方のずれは何でしょう。

水谷　自分でも優勝できると思っていなかった。周りが思っている以上に、優勝することは困難。やっているほうからすると毎回難しいんですよ。応援している人とか、周りの人には「優勝できると



「過去の結果にこだわらず
自分の感覚が悪かったら
すぐに用具を変更できるのが強さです」

水谷隼●みずたに・じゅん
1989年6月9日生まれ。静岡県磐田市出身。全日本選手権のバンビ・カブ・ホープスの各年代で優勝。ドイツ・ブンデスリーガでの卓球修行によってその才能を磨いた。09・13年世界選手権では、岸川聖也と組んだダブルスで銅メダルを獲得。全日本選手権では史上最年少の17歳7カ月で優勝し、平成26年度全日本選手権大会では7度目の優勝を達成。2014年ITTFワールドツアー・グランドファイナル優勝、世界ランキング5位（15年2月現在）

思っていない」とは言えないじゃないですか。本音は、優勝できると思っていない、良いプレーをしたいだけ。ただルールが変わった時の自分は強い。今までスピードグルー禁止や補助剤禁止の後の全日本でも勝っている。プラスチックボールになった今回は、そういう自信がありました。

――終わってみたら、やはり笠原戦が大きなポイントだった。

水谷 そうですね。あそこで簡単に勝っていたら、その後の試合も同じようにはなっていないと思う。その試合で10-5から追いつかれたゲームを何とか勝って、森薗戦や、吉村戦でも同じようにリードしていて追いつかれて、何とか勝つというゲームをしていった。リードしても気を抜かないというゲームができた。

ひとつ言えるのは、去年も今年も全部1ゲーム目を取っていること。笠原戦を除けば、去年も今年も全部3-0でリードしている。邱さんに、スタートが遅いから最初から飛ばしていけと言われていますから。

半年前のぼくと、今回のぼくは全然違うサービスを出すし、サービスが変わればその後の戦術も違う

――9年連続の決勝進出もすごい記録です。

水谷 本当にきついんですよ。毎年5年は寿命を縮めていますよ。名前が残るのは優勝者だけですから。去年はもがいて苦しんでいる中での優勝だった。自分を取り戻すための優勝だったし、今回は順調にいっている時の優勝。

――だから自信があった……。

水谷 いや、それは自信じゃないですから（笑）。

――だって、明らかに今までと現在の到達点が違うわけだから、それは自信であり、力をつけているという手応えはあったと思います。

水谷 ありますけど、卓球の場合はあくまでも対人競技だから、記録を争うスポーツじゃないし、相手によって変わってしまう。たとえば笠原戦のように、ネットインが3本連続で続いたり、ボールが違ったりとか、そういうハプニングはあるわけで、いつも不安は抱えながらやっている。ただ以前は優勝しなきゃというガチガチの緊張感はあった。

――技術面では、自分の中でそれぞれのテクニックがアップグレードしている感じかな。

水谷 特にレシーブですかね。前よりもチキータの回数も増えている。点数を取るためにはチキータは必要な技術だし、攻撃的になっています。サービスも変わりました。その時に合った良いサービスを出します。だから半年前のぼくと、今回のぼくは全然違うサービスを出すし、サービスが変わればその後の戦術も違う。昔よりはサービスエースは確実に減っているけど、試合の組み立てはうまくなっていると思います。

――この1年、体の面ではどうでしょう。

水谷 12月くらいから4kgぐらい体重が増えているので、今迷っています。重くなっても筋肉をつけていくのか、体重をキープするのか、もう一回落とすのか迷っています。動きは前よりいいんですけどね。ただケガはなくしたい。最近は腰、背中、足とか全部がきつい。特に去年から、25歳を過ぎてからきつくなっています。

――メンタルは？

水谷 全然違います。相手を冷静に分析することができるようになっている。前よりは、負けたとしても仕方ないと思える。ここで負けたとしても試合は次々続いていくわけだから、次につながる試合ができればいいと思ってやっています。

――丹羽、（松平）健太が続き、その下に村松もいて、森薗もいるというように、第2集団が上がってきている中で勝ち続ける意味は大きいと思う。最初に優勝した9年前とは全日本のレベルが全然違いますね。

水谷 レベルは全然違うけど、自分は自分というか、今のままでは自分のレベルまで他の選手はこれないと思う。

――君と他の選手との違いは何でしょうか。

水谷 環境が違います。ぼくは日本の環境を嫌って海外に行ったわけで、ぼく目線で言えば日本にいたら強くなれない。ただ、生活は海外のほうが厳しいし、日本にいるほうが友だちもいるし楽しい。日本を離れたくないというのは理解できる。全日本が終わってすぐに海外へ出発して試合をする、世界選手権が終わってそのまま海外リーグでやるということばかりなので、日本でのんびりやっている選手に負けたくない。ぼくは試合もたくさんしたいし、日本では満足できないから……その意識の差じゃないですか。

今はブンデスリーガに行っている吉田（雅己）も活躍している。しんどいはしんどいけど、海外にいたほうが強くなれるという感覚があります。

――今回の全日本ではボールを含め、運営面でもいろいろ変えました。主催者の目線と選手の目線というのは違うものだけど、優勝後の記者会見でも改善してほしい部分に言及していましたね。

水谷 改善点は以前から山ほどあると思っています。今回はボールですね。ボール選びが戦術のひとつになるのはおかしい。たとえばニッタクのボールだけでやるなら何ら問題ない。いくつかの中から選ぶというやり方が問題なんです。来年からボールは1種類にしてほしい。

それに、プレーに影響がある部分で改善してほしいのは、照明と背景のLED。背景の水色に白い文字ではボールが見えない。また、上の照明は、サービスの時に全然見えなかった。照明やLEDなどプレー領域内のことは選手に意見を聞いてからやらないと、いつかモメる時がくると思う。

9月にプラボールになってから試行錯誤してきた。調整に3カ月間かかりました

2012年ロンドン五輪ではメダルを

期待されながらも無念の敗退。翌年の世界選手権でもシングルスでは初戦敗退。水谷は辛酸をなめた。その後、ロシアリーグへ参戦し、ドイツの『フリッケンハオゼン』監督の邱建新氏とコーチ契約を結んだ。身体も改造した。この1年半で水谷隼は確実な進化を見せている。

また、1年前に結婚し、長女も生まれた。孤高のチャンピオンの中で何かが変わってきている。

●

――1年以上継続して邱建新コーチとやってきました。彼のコーチングの良さとは何でしょう。

水谷　一昨年、コーチ契約をして、その後、全日本で優勝して、邱さんとは日々連絡を取ってきました。ひとつは邱さんの選手としての実績ですね。世界のトップで活躍してきた選手たちと同じ土俵で戦ってきた人で、自分の眼で世界を見てきた人です。たとえば、中国NTはこういう練習が多かったと言われると納得できるし、コーチとしての実績もある。

――コーチというのは、戦術面にすぐれた人、技術を教えるのがうまい人、メンタルを教えるのがうまい人というように、様々なコーチがいます。

水谷　邱さんはすべての能力が高い。試合の中での分析力もあります。今回の全日本でもお互いが何を求めているのかを話し合ってました。自分は試合中にこういうアドバイスがほしいということも言いました。普通、コーチにこういうアドバイスをしてほしいとは言えないけど、そのくらいの信頼感がお互いにあるから、試合前に「邱さんはこういうアドバイスが多いけど、おれはこういうアドバイスがほしいんだ」とはっきり言いました。準決勝から急にアドバイスが英語になりました（笑）。熱くなると英語になるんですよ。

――この1年間を振り返ると、世界選手権もあったし、12月のグランドファイナル優勝もあり、世界ランキングも5位まで来ています。

水谷　プラボールになってから過去の自分をリセットしました。世界選手権の内容は良かったけど、プラボールになって全く別の卓球をしていかなくてはいけない。今でもまだ葛藤している。言葉で表現できないくらい、用具調整は大変だった。自分が求めているプレーは一生できないんじゃないかと思うほど大変でした。最初は全然何もできなかった。

全日本の初日にラバーの硬さを少し変えました。それがぼく自身の強さだと思う。過去の結果にこだわらず自分の感覚が悪かったらすぐに用具を変更できるのが強さです。9月にプラボールになってから試行錯誤してきた。調整に3カ月間かかりましたけど、案外早く落ち着いた感じです。

――結婚して変わったことはありますか。

水谷　自分自身が丸くなりました。自分でも変わったと思います。行動とかもそうだし、昔の自分だったら絶対こうしなかったのに今はこうしているというのが多い。自分のことよりもまず家族のことを考えている自分がいるわけです。他人の子どもを見ていても可愛くてしょうがない（笑）。昔は「子どもはうるさいな」と思っていたのに、人間変わるみたいですね（笑）。

ただ、ぼくは真面目でもないし、好青年でもないですよ（笑）。それは言っておきます。でも練習に対しては真面目です。休みの日とかでも、ちょっと1時間だけでもやっておこうと明治大に行ったりします。前は遊びに行ったり、1週間くらい練習しなくても平気だったけど、今は少しでも時間があれば練習したいと思っているし、本当に卓球が好きだからやっています。

――全日本は1年のスタートなのだろうか、締めの大会なのだろうか。

水谷　スタートでも締めでもない。生活の一部みたいなもんです。ただ特別な大会であることは間違いない。観客も多いし、メディアも取り上げる。観客もメディアもいなかったら、あそこまで盛り上がらない。

――あと何回くらい優勝するんでしょ

う。

水谷 いつも優勝は無理だと思っているけど、今は9回以上優勝して、記録を塗り替えることを目標にしています。

――自分のピーク（頂点）は見えますか？

水谷 まだ成長できると思います。ここを改善したいというところは多い。戦術と身体は良くなってきたから、あとは技術ですね。

――7回も優勝していても、「技術はまだまだ」？

水谷 技術は他の選手のほうが上ですよ。

――イメージトレーニングで自分の完成形が見えますか？

水谷 イメージでは見えていて、これができたら世界チャンピオンだというのがあるけど、イメージどおりのプレーは実際にはできない。

――前よりもアグレッシブなプレーになり、台との距離も近くなっているのは単にプラボールになったからそうなったのか、自分の卓球が改造されたのか。

水谷 両方ですね。この1年間で練習メニューも変わっていますから。試合が増えたので、試合の中で自分が得点できる領域がわかってきた。台から下がったら点数は取れませんから。今は攻めて点を取りたい。今でもラリーを楽しみたい部分はありますが、ただ全日本に限って言えば、今回は台から下がる局面があまりなかった。笠原戦のように競った時には下がることも多かったし、リードされると守りに入ってしまう。

――世界ランキング5位、上に4人です。ここから上がるのは大変ですね。

水谷 上の選手との対戦が楽しみですね。プラボールになって、用具もやっとしっくり来ている。しっくり来てから彼らと対戦していないから、（2月の）カタール、クウェートや世界選手権で対戦するのが楽しみです。

――前回のパリ大会では屈辱的な敗戦を喫しました。蘇州大会はどうですか？

水谷 パリで負けたことはしょうがない。蘇州のことはあまり考えていない。とにかく一戦一戦頑張ることしか考えていない。

――メダルは？

水谷 シングルスで獲ったことがないからわからない。（パリ大会では）ダブルスのメダルは「こんなもんか」と思いました。横浜大会（09年）の時はうれしかった、地元だったから。

――全日本直後に日本代表が発表されて、シングルスのみの出場になった。本当はダブルスも出たいという気持ちもあったと思う。

水谷 ぼくは受け入れるだけです。（ダブルスは）全日本で優勝して選ばれなかったらガーガー言っていたと思う。良い選手がいっぱいいるからしかたない面もある。

――リオ五輪は意識しますか。

水谷 意識しません。今の生活に満足していますから（笑）。

――子どもがいると人生観も変わるでしょ？

水谷 子どもができてから、自分の思い描いていた人生の道がまっすぐ行くはずだったのが斜めにずれている。でもそのずれているのもいいかなと思えるんですよ。自分の性格上、独身で好きなことをやって結婚はしたくないと思っていたから、今の生活は考えられないですよ。ひとりで生活しているとわからないけど、家族で暮らしていると人のありがたみがわかるんですよ（笑）。

――ずいぶんいい人になった（笑）。今は充実感あるでしょ。

水谷 ありますね。幸福感とかも。ただ、自分が通ったつらい道は他人に勧められないですね。

――卓球ファンからすれば、水谷隼が世界の頂点に立つのを見たいはず。

水谷 でも、下から追い上げられていて、同時に上を目指す今のポジションも嫌いじゃないですよ。引退する寸前に頂点に立つのはいいけど、先に（頂点に）上ったらその先が見えない。

たぶん、石川（佳純）選手のほうが全日本の記録でも世界でももっと上に行きますよ。ただケガだけは誰にもわからない。彼女がケガがないのはえらいですよ。ぼくも大学時代は、絶対自分はケガ、故障をしないと思っていた。自分の体は万能だと思ってました。

25歳から27歳まではいろんな意味でピークだと思うし、今はまだ上に行けると思っている。ここからの2年、16年のリオ五輪までが勝負で、その後東京五輪までは成長していきたい。そのためにはまず体です。技術は何とかなるけど、体がダメだったらボールも打てないですから。

「プラボールになってから過去の自分をリセットしました。プラボールになって全く別の卓球をしていかなくてはいけない」

●

対戦が楽しみと言っていたカタール、クウェートでの中国選手との試合は、日本卓球協会の選手団の中東派遣中止によって、次のワールドツアーか世界選手権までお預けとなった。

昨年の優勝が「王者回帰の意地」だったとすれば、今回の優勝は「王者、さらなる進化の始まり」だった。家族を持ち丸くなったと言うが、卓球に対する「オレ流」のストイシズムは消えていない。

水谷隼の卓球の完成形はまだまだ先のようだ。

（文中敬称略）

THE CHAMPION'S INTERVIEW 2
KASUMI ISHIKAWA

1 ★★★ WOMEN

［チャンピオンインタビュー］

石川佳純

●全農

「勝つしかない。競った場面でも、これは相手との勝負でもあるし、自分との勝負でもある。だから攻めるしかないと思ってました」

負けない強さがある。
準決勝の前田戦で
窮地に追い込まれながらも乗り越えた。
女子では54年ぶりの三冠を達成した石川佳純は
苦しみながらも世界ランキング4位の
意地と強さを見せつけた。
「全日本卓球」を制した女王の涙と
笑顔の向こう側には何があったのか。

聞き手＝今野昇（本誌編集長） *interview by Noboru Konno*
写真＝江藤義典&奈良武 *photographs by Yoshinori Eto & Takeshi Nara*

今年は競った試合、苦しい試合が多かった分、去年よりもうれしかった

一度も負けないで「全日本卓球」（全日本選手権）を終えた石川佳純は、苦しかった全日本を振り返った。試合中の張り詰めたアスリートの顔と違う素顔の彼女は、22歳を目前に控えた大人の女性の佇まいの中にいた。

石川は混合ダブルス、女子ダブルスと優勝を重ね、1月18日の最終日、東京・千駄ヶ谷の東京体育館のセンターコートに立った。

準決勝の前田戦では1-3とゲームをリードされ、絶体絶命のピンチを迎えながらも冷静にプレーする。最終ゲームでも8-9まで追い込まれ、観客が固唾を呑む中での冷静、かつ思い切ったプレー。そこで見せたのは世界トップランカーとしての強靭なメンタルと卓越したテクニックだった。

●

——2年連続優勝。改めておめでとうございます。

石川　ありがとうございます。

——5年連続の決勝でした。

石川　あっという間ですね。うれしいです。

——今回はそれに三冠王も加わりました。大会前から狙ってましたか？

石川　もちろん、3種目出るからには3つ獲りたかったし、去年は二冠で悔しい思いをしたので、今年は獲りたかった。

——三冠への挑戦、こだわりというのはなぜでしょう。

石川　違う種目で3つ獲るのは難しい。去年改めて難しさを感じました。私はパートナーにも恵まれているし、良いパートナーじゃないと狙えないわけだし、絶対勝ちたいと思わないとダブルスやミックス（混合）は難しい。大事なところで踏ん張れたからこそ勝てたと思います。

——強いと言われる選手でも、シングルスが本番でダブルスでは調子を出していくために戦う人もいます。

石川　ダブルスで準備するという考えは全くないです。出るからには絶対負けたくない。3種目出るなら全力で3つ獲りにいくという気持ちでした。

——女子では54年ぶりというのは知っていたんですか。

石川　全然知りませんでした。

——大会前の仕上がりとしてはどうでした？

石川　すごく良くもないし、悪くもないという感じでした。去年と同じくらいですかね。

——まず混合ダブルス、そして女子ダブルスで優勝しました。

石川　厳しい試合がたくさんあったんですけど、お互いが助け合ってプレーできて、勝ち取った優勝でした。

——女子ダブルスは特に苦しい試合がありました。平野美宇・伊藤美誠組との試合や、決勝も苦しかった。

石川　苦しいところでペアの強さがわかると思います。平野（早矢香）さんとは8年くらい、12歳の頃から組ませてもらっているので、お互いわかり合えているところは他のペアには絶対負けていないし、粘り強い気持ちでできました。

——苦しい局面を乗り越えられたのは、メンタルですか、技術ですか。

石川　やっぱりメンタルのほうが大きいと思います。最後は気持ちが勝負を決めます。大事なところで平野さんに声をかけてもらったりとか、何とか1本を入れてつなぐ、何とか得点するというプレーが何度もあったので、最後勝てたのが良かったと思いますね。

——優勝した瞬間の二人の喜ぶ姿が何とも良い雰囲気でしたね。

石川　「うれしい～！わあ！」という感じでした。去年はゲームも落とさずに優勝したけど、今年は競った試合、苦しい試合が多かった分、去年よりもうれしかったし、2連覇できたのもうれしかったです。

——シングルスでは4回戦で宋恵佳選手を4-1、加藤美優選手には4-2、次の準々決勝の伊藤美誠戦は4-0で勝ちました。

石川　（1ゲームを落としただけで優勝した）去年とは全く違って、思っていた以上に相手がぶつかってきたし、自分も最初から最後まで自分の思うようなプレーができなかった。12月のグランドファイナルのような試合とは全く違っていましたね。

それはやはり気持ちの面もあるし、相手も向かってきて、今までと違う感じ方でした。守りに入ってしまった面もあったと思います。

——そして今大会の最大のヤマ場となった前田美優選手との準決勝を迎えます。すごい試合になりました。

石川　彼女と試合をするのは何年ぶり……記憶にないくらいです。練習もほとんどする機会もない。最初相手のボールに合わせることができなかったし、前田さんも当たっていて、今日は調子いいんだろうなと感じました。

——1ゲーム目は取ったものの、2、3ゲーム目を落としています。しかも、6本、7本くらいまではタイスコアで行きながら、最後に離されてゲームを落とすという、今までにないパターンでした。

石川　2ゲーム目、3ゲーム目が良くなかったですね。気持ちの部分ですね。4ゲーム目はジュースになってから前田

「思った以上に相手は向かってきた。これが1年前の自分だったら耐えられなかったと思います」

さんが思い切って何回も打ってきて、落として1-3になって、そこで逆に落ち着きました。開き直りではなく、冷静になれました。ここからが勝負だと思いました。4ゲームを取られない限りは負けではないから、絶対3-3にしてやろうと思いました。精神的にも2、3ゲーム目が良くなかったですね。

――でも、1-3とゲームをリードされた時に焦りとかはなかったですか。

石川 気持ちも切り替えたし、1-3になった時の最初の1本目のボールを打った時に「あ、大丈夫だ」「ここからが勝負」と自分で思えたんです。思ったよりは焦りはなかったですね。

――5ゲーム目を11-3で取り、ゲームを2-3にした6ゲーム目はどうでした？

石川 だんだんボールにも慣れてきて、タイミングも合ってきました。

――前田さんのバックハンドもミスがなく、フォアのドライブ強打やスマッシュもミスなく入ってきている状態でした。石川さんは最終ゲームの最後の2本に象徴されるようにバックへ深く切れたサービスを出し、持ち上げてきたボールをミドルへ狙う、というような戦術を使っていましたね。

石川 もちろん（戦術は）考えてますけど、相手が最後の最後まで入るとは正直思わなかった。もし最後まで入ってきたら相手が強かったということです。

6ゲーム目、ここからは実力勝負

準決勝の前田（向こう側）戦ではゲーム1-3と追い込まれ、今大会最大のピンチを迎えた

前田戦の最終ゲーム、8-9から見事な速攻を見せ、11-9の勝利を収めた石川。この直後、大粒の涙が頬（ほほ）を伝った

4	3
石川佳純 VS 前田美優	
11-9	11-3
8-11	11-6
7-11	11-9
11-13	

Semi-Final
準決勝

石川佳純●いしかわ・かすみ
1993年2月23日生まれ、山口県出身。四天王寺高卒、全農所属。13歳の時に全日本選手権でベスト4入り、平成22年度全日本選手権で初優勝。平成25年度・26年度の同大会で2連覇して、通算3度目の優勝を果たし、26年度は女子では54年ぶりの三冠王となった。09年世界選手権ではシングルスベスト8、12年ロンドン五輪では団体銀メダルを獲得し、シングルスでも日本人初の準決勝進出を果たした。2014年ITTFワールドツアー・グランドファイナル優勝。世界ランキング4位（15年2月現在）

です。（相手が）4ゲームを取るのは簡単じゃない。

左対左だからバック対バックの勝負に絶対なる。途中から相手のミスも出てきたけど、前田さんは全体的に好調で良いプレーをたくさんしてきたので、こっちも攻めていかなければ勝てないと思っていました。

――それにしても、最終ゲームの展開もスリリングでした。3-3、5-5、6-6、8-8と点数が離れない。そして、8-9と1本リードされる。相当にタフな展開です。実際にやっている本人としてはどういう気持ちだったのでしょう。相手はイケイケで向かっていけばいいけど、石川さんの精神状態はどうでした？

石川　何が何でも負けられないですよね。どんなことがあっても負けないぞと。競ることはわかっていた。厳しい試合になることはわかっていた。相手も強かった。でも、「とにかく負けることは許さないぞ」と自分自身に言い聞かせ、勝つことだけを考えて、集中するだけでしたね。勝つしかない。競った場面でも、これは相手との勝負でもあるし、自分との勝負でもある。だから攻めるしかないと思ってました。最後、負けることは考えずに、攻めること、勝つことだけを考えてました。

ここでボールを入れにいっても絶対打たれるし、前田さんも調子が良くて強気だったので、こっちも強気で攻めるしかなかった。

「出るからには絶対負けたくない。3種目出るなら全力で3つ獲りにいくという気持ちでした」

――勝った瞬間はウルッと来ましたね。

石川　ウルじゃないですよ。メッチャ泣いてました、号泣してたじゃないですか（笑）。負けなくて良かった。勝てて良かったと思いました。思った以上にプレッシャーがかかっていたんですね。

技術的にも精神的にも去年よりは強かったから乗り越えられた。だからこそ、3種目とも戦えたのかなと思います

女子では山泉和子（現姓伊藤）以来、半世紀以上達成されなかった三冠王。男女合わせても齋藤清以来、31年ぶりの快挙を達成した石川佳純。世界のトップ集団のひとりとして、日本女子を牽引する女王は、まだ21歳。それなのに決勝の森薗戦以外はすべて年下の挑戦を受けた。優勝後の会見では「ここまで向かってこられるのは初めてです。『え、こんなに（向かってくるのか）』と思ったほどだったし、自分でも思った以上にプレッシャーを感じていた」と語った。

――準決勝の激闘の後、決勝まで少し時間がありました。相手は同級生の森薗選手でした。

石川　準決勝であれだけ苦しい試合をしたし、時間も空いてたから決勝まではしっかり準備ができました。相手が誰であっても自分との戦いだし、冷静に一球一球落ち着いてやろうと思いました。

――決勝に入る前の心理状態というのは、去年と比べてどうだったのでしょう？

石川　やっぱり絶対勝ちたい。ここまで何とか勝ってきて、粘ってきて、勝たないと意味がないと思ってました。

――森薗さんとは日本リーグではチームメイト（日立化成）であり、同級生ですね。

石川　去年のワールドツアーのロシアオープン（準々決勝）以来の対戦でした。やっぱり決勝で当たるとなると違いますね。森薗さんとは小学生の時からずっとやってきて、決勝で対戦できることもうれしかった。今回、ずっと年下としかやっていなかったので思い切ってやれると思いました。

今回は初戦から簡単な試合はひとつもなかったし、本当に苦しかった。思ったようなプレーは全然できないし、思った以上に相手は向かってきた。これが1年前の自分だったら耐えられなかったと思います。去年の決勝は調子はすごく良かったし、精神的にも技術的にもあの時点で一番強い自分でプレーできた。今年はそうではなかったけど、絶対負けないという気持ちを維持できたし、技術的にも精神的にも去年よりは強かったから乗り越えられた。だからこそ、3種目とも戦えたのかなと思います。

――優勝を決めた瞬間は？

石川　長い1週間が終わった～と思いました。

――去年より大会が1日長かったけど余計に長く感じましたか？

石川　それはありますね。シングルスとダブルスの順番も違うし、本当にしんどかった。

――ワールドツアーでは大体が金曜から日曜というのが試合のサイクルだけど。

石川　そうなんですよ。金・土・日曜に全力で戦うというのに慣れているので、今回はすごく長く感じましたね。日曜日までの道のりが長すぎて、気が抜けない試合が毎日続くのがつらかった。

――緊張感が切れないようにとか、リラックスできるように気を遣ったのかな。

石川　緊張感が切れることはないので、

表彰台で涙を流す石川。苦しい闘いと重圧から解放された瞬間だった

かかるし、緊張する。私たち卓球選手はみんな全日本での優勝を目標にしている。簡単には勝てないのが全日本ですね。みんなのレベルも上がっていて、仲間としてライバルとして競争したことで私も世界ランキングを上げることができた」と石川は答えた。

まさに、この「全日本」という大会が石川選手を成長させ、自信と屈辱を与えてきた。一方、五輪や世界という舞台で修羅場をくぐり、実力を備えた石川は「全日本」という舞台に戻ってくる。

●

——以前、全日本選手権という大会は最後の締めではなく、1年のスタートなんだと言っていましたが、去年の優勝からの1年間を振り返ると、どういう1年だったのでしょう。

石川　去年の全日本で優勝できて、世界選手権、アジア競技大会、そしてワールドツアーのロシアオープンとグランドファイナルでの優勝といろいろありました。絶対に負けられないというところを何とか乗り越えた。そういう試合を何回も経験させてもらったことで、ひと回り大きくなったし、自信がつきました。技術的にはバックハンドのコースや変化、サービスからの3球目も前より良くなった。プラボールに変わって以降もだんだん対応できているし、やりにくさはない。

この1年間、基本を相当にやったし、それをやりながら試合で勝つための練習もやってきた。フィジカル（身体）的には男子の合宿に入れさせていただいて一緒にトレーニングさせてもらったりして強くなったと思います。

——大会前は、石川さんと福原さんによる一騎打ちの決勝というのが大方の予想でした。この半年間を見ても、二人の調子は良かった。もし対戦したら世界的なレベルの試合を期待していました。大会直前に福原さんの棄権を聞いた時にはどうでした？

石川　もちろん決勝で当たる確率は高いと思っていたし、ロシアオープンでもグランドファイナルでも対戦しているのでリラックスできるようにしました。でもできないんですけどね（笑）。

世界選手権はシングルスとミックスで最高のプレーをしてメダルを目指します

優勝会見で、こういう質問が飛んだ。

「一般の人から見ると、なぜ世界ランキング4位の石川選手がこんなに全日本で苦しむのか、と見えてしまう。なぜですか」。

確かにそうだろう。しかし、それが全日本という大会の重さであり、怖さなのだ。「全日本はそれだけプレッシャーも

「中国選手が世界という舞台で
どれだけ外国選手から向かってこられるのか、
どれだけプレッシャーを感じているのか。
そういうことが少しわかった気がしました」

で準備はしてました。（棄権を聞いた時は）びっくりしました。正直残念でした。私は試合をしたかった。

――石川さんは若いということもあるけど、体のほうは問題ないですか。

石川 やっぱり自分の力を出せるようにするためにも、ケガの予防のためにもトレーニングをしなくてはいけない。今ケガをしないのはトレーニングのおかげ。練習の負荷も大きくなっていくので、体を強くすることを含めてトレーニングは必要です。

――去年のインタビューの時には自分がミスした時の態度や表情を修正したいと言っていたけど、最近選手としての風格が出てきましたね。

石川 去年1年の自信かなと思います。良い成績を積み重ねることができて、それが自信になっているのかなと。

――去年の世界選手権と今回の全日本、どちらが重かったのでしょう。今回は相当に重そうでしたね。

石川 世界選手権は重いですけど、まず世界選手権と全日本選手権のレベルも違うし、世界選手権が終わって半年で自分のレベルも上がっています。世界選手権も絶対負けられないという気持ちでやっているけど、全日本はまた別の重さがあります。（9年連続決勝へ進む）水谷君のすごさを改めて感じました。尊敬します。

――国内でガチンコでやる試合もあまりないけど、全日本選手権をこれだけやってきて、その全日本を通して成長して強くなっていく自分がいますか？

石川 それはすごくあると思います。自分は強い選手に勝つことが自信になりますが、自分と同じか少し下の選手に勝つことはすごく難しいことで、そこで勝っていくことで大きな自信になりました。

――その自信が世界や五輪という舞台で戦う時にプラスになるということですね。

石川 それは生きてきますね。今回思ったのは、中国選手が世界という舞台でどれだけ外国選手から向かってこられるのか、どれだけプレッシャーを感じているのか。そういうことが少しわかった気がしました。

――1年後の全日本も3つ狙いますか？

石川 その質問は「なし」でお願いします（笑）。いや、実際は苦しくて……打ち込まれ続ける感じですから。

――1月発表の世界ランキングで4位になりました。

石川 うれしいですね。グランドファイナルで優勝できたから4位になれたのかなと思います。4位になれたからもっともっと上を目指したい。世界選手権はシングルスとミックスで最高のプレーをしてメダルを目指します。そしてリオ五輪や東京五輪を目指して頑張りたいですね。

――もうリオ五輪が来年に迫ってます。

石川 もう1年前から私の気持ちはリオですから（笑）。

●

世界を目指す日本のトップ選手にとっても「全日本」は通過点ではない。多くのマスコミや何百万人という卓球ファンが注目する特別の舞台なのだ。石川佳純は世界での自信を武器に、しっかりと立ち止まり、無敗の女王として全日本を終えた。

さあ、次の勝負の舞台は中国の蘇州だ。そして、その向こう側にはリオデジャネイロが待っている。

（文中敬称略）

表彰式後の優勝記者会見で「カスミスマイル」を見せた